

# 地域学習における 児童のシビックプライド形成に関する研究

井形 康太郎<sup>1</sup>・田中 尚人<sup>2</sup>

<sup>1</sup>学生会員 熊本大学大学院 自然科学教育部土木建築学専攻 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)

E-mail: 186d8352@st.kumamoto-u.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 熊本大学准教授 熊本創生推進機構 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)

E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp

現代の地域コミュニティには、地域住民の地域に対する関心の低さという課題がある。解決には、地域に対する愛着と誇りという意味のシビックプライドの考え方が必要である。この考え方の醸成のきっかけとして、小学校で取り込まれる地域学習が位置づけられる。本研究では、熊本市内にある向山小学校を対象に、地域学習によって児童に起きる、地域に対する意識の変化の構造とその行程を明らかにすることが目的である。児童の好きな風景の絵や理由と10年後の校区をこうしたいという設問の回答を、共起ネットワークなどを用いて分析した。その結果、地域学習を通じた他者との関わりが地域に対する意識の変化を生むことが分かった。

**Key Words :** regional study, civic pride, student's area image, others

## 1. はじめに

### (1) 背景・目的

現代の地方部では、就業機会の不足や地方の魅力の低下などが原因となり、都心部への人口流出という課題に直面している。さらに、転出超過などで人口流出に歯止めがかからず、衰退の恐れのある自治体は「消滅可能性都市」と呼ばれ、重大な社会問題となっている。

地方部に限らず、都心部でも同様に、自治会や町内会の弱体化といった地域コミュニティの衰退や、人間関係の希薄化などの課題もある。

そしてこれら課題の根底には、「住民の地域に対する関心の低さ」という大きな課題がある。地域に対して無関心な住民が増えることが、無縁社会に繋がり、前述した様々な課題の進行を加速させる恐れがある。

これらの課題の解決には、「地域に対する愛着と誇り」という意味であるシビックプライドの考え方が重要となる。このシビックプライド醸成のきっかけとして、小学校中学年で取り込まれる地域学習が位置づけられる。

そして、このシビックプライドの原点、きっかけとなる子どもたちの地域への認識と愛着形成に関する意識変化に着目しようと考えた。

そこで本研究では、熊本市内にある向山小学校を対象校とし、地域学習によって児童に起きる、地域に対する

意識の変化の構造とその行程を、児童から回収した宿題や振り返りシートの分析を行い、明らかにすることを目的とする。

### (2) 既往研究と位置づけ

小学校をはじめとする教育機関で行われている地域学習やそれに類似した総合学習について、教材や授業のプログラム、児童の意識について分析、考察された論文はこれまでも見られる。例えば、谷口<sup>1)</sup>は、交通をテーマにした学習を通して、対象校毎の地域特性とそれぞれで異なった教育プログラムの違いが、児童の交通に対する態度に影響を与えたと論じている。

さらに、地域学習に用いられた教材についてや教材の提案に関する研究として、菊池<sup>2)</sup>、鈴木・長尾<sup>3)</sup>の研究が挙げられる。これらの研究では、教材を評価し、効果について考察している。

また、地域学習とシビックプライドに関する研究として、田中・堀尾<sup>4)</sup>の研究が挙げられる。この研究の対象となったのは、いくつかの学習手法が有る中の「まち歩き」だけに着目したものであった。

シビックプライドについては、引地・青木<sup>5)</sup>の研究が挙げられ、地域の肯定的な印象を持つことが、地域の愛着形成に寄与すると論じている。地域学習を通して、地域を知ることにより、子どもたちが地域に対して、肯定

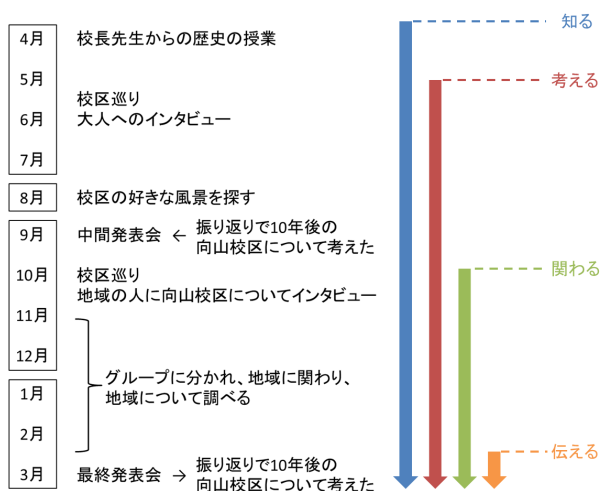


図-12 地域学習の年間計画と意識変化の構造

られる。

そして、この意識の変化が重要である。地域に対する意識の変化が、学習を行った成果となり、これからの地域との関わり方において影響を及ぼすことになると考えられる。

### (3) 意識変化の構造

意識変化の構造をまとめると図-12のようになると考えられる。4月からは、地域を「知る」ための学びの場が設けられていた。この「知る」ことは、校区巡りやインタビューなど年間を通して継続して行われていたと考えられる。

次に始まったのは、地域を「考える」ための学びの場である。中間発表会時の大人も交えた意見交換の場や、グループ活動がそれに当たると考える。

次は、地域に「関わる」ための学びの場である。インタビューや発表会、グループ活動などがそれに当たり、より実践的で多くの学びを得られる時間であったと考える。

最後は、最終発表会が学習の成果を「伝える」ための場であったと考えられる。

このように、「知る」「考える」「関わる」「伝える」が継続しながら順番で、学びの場が設けられていたと考えられる。この一連の流れで小学生たちは、学びを得ることができたと同時に、地域に対する意識の変化が起きたのではないかと考えられる。

## 6. おわりに

### (1) 本研究のまとめ

本研究で明らかになったこととして以下の点が挙げられる。

- ・児童の地域の捉え方には、「居場所として捉えている風景」（23人/65人）と「対象として眺めている風景」（42人/65人）の2つに大別できる。
- ・一年間の地域学習の前後の振り返りシートの分析から、学習内容が児童の考える地域ビジョンに影響を与えることが分かった。また、地域学習を通して、児童の地域ビジョンがより具体的になったり、地域の捉え方が具体的になったという変化が表れた。
- ・変化の要因として、地域学習の中での、地域の方々や保護者といった「他者との関わり」が要因であると考えられた。
- ・意識変化の構造として、地域を「知る」「考える」「関わる」「伝える」の順で変化したというモデルが考えられた。

以上、KJ法を用いた分析により、地域への認識と捉えられる児童の原風景を整理できた。また、一年間を通じた地域学習の前後の計2回のデータから、地域に対する想いの変化が読み取れた。すなわち、地域学習を通じたシビックプライドの形成過程を明らかにしたと考える。

### (2) 今後の課題・展望

5章より、意識変化の構造が、知る、考える、関わる、伝えるといった流れであるという一つのモデルが考えられた。このモデルを裏付けるためにも継続的な調査及び分析を行っていきたい。

### 参考文献

- 1) 谷口綾子：交通問題に対する小学生の態度変容と地域特性・授業プログラムの関連分析，土木学会論文集 H, Vol. 1, pp. 49-66, 2009.3.
- 2) 菊池八穂子：当事者意識を育てる小学校社会科地域学習の単元開発—第3学年小単元「農家の仕事」を事例として—，名古屋学院大学論集人文・自然科学篇，第53巻第2号，pp. 107-124, 2017.
- 3) 鈴木亜弥，長尾徹：地域学習を支援する地域教材の提案—千葉県四街道市の地域カルタ「よつかるた」の提案—，日本デザイン学会第57回研究発表大会，2010.
- 4) 田中尚人，堀尾和美：小学校地域学習におけるシビックプライド涵養に関する実践的研究，実践政策学，第2巻1号，2016.
- 5) 引地博之，青木俊明：地域に対する愛着形成の心理過程の検討，景観・デザイン研究講演集，No. 1, 2005.
- 6) シビックプライド研究会：シビックプライド都市のコミュニケーションをデザインする，宣伝会議，2008.
- 7) 羽鳥剛史，片岡由香，牧野太亮：住民参加型・回覧型「思い出マップ」によるシビックプライド醸成策に関する研究—四国中央紙妻島町「棹の森」を対象とした取り組み事例—，公益社団法人日本都市計画学会都市計画論文集，Vol. 50, No. 3, 2015.10.
- 8) 川喜田二郎：発想法創造性開発のために，中公新書，1967.